

中国の中等職業学校における職業教育のあり方に関する研究

—大連市中等專業学校生徒の進路意識調査を通して—

時代 (東京学芸大学連合大学院)

I 問題の設定

中国の中等職業教育は、日本と類似し、学校と企業間の斡旋によって、生徒を学校から社会へ送らせるという仕組みになっている。現在の中国では、経済的発展の時差から生じた地域間の産業構造の差異、またそれらによって生じた中等職業教育の量差について、教育学者に注目が浴びられる一方、経済的発展している地域、いわゆる都市部において、大量の中等労働技術者が求められ、生徒が学校から職業へ移行のプロセスは、就職状況の良さ(就職率 94.6%)によって、あまり問題視されていないともいえるだろう。

しかし、都市部の若者失業問題が浮かびつつある。2002年の統計で、都市部失業数が770万人、そのうち25歳未満の割合が20.2%であり、2003年に失業数は800万人、そのうち35歳以下の割合が70%という数字から、若者の失業問題の深刻さが窺える。「転職」、「失業」に繰り返している若者の現象から、若者の職業観を考察する必要があると考えられる。研究の出発点として、中等レベルの技術労働者の養成を目的とする中等職業教育に焦点を当て、生徒の職業意識の形成プロセスを探る。

II 調査の対象と方法

- 1 調査対象 中国遼寧省大連市中等專業学校4校の3年生。有効回答数962部、有効回答率は68.7%である。
- 2 調査方法 無記名質問紙調査(選択式、一部記述式)
- 3 調査時期 2004年6月下旬～9月下旬

III 分析の結果

1 中学校から職業学校への進路決定の実際
生徒が中学校から、職業学校に進路を決める実態を探るによって、中学校3年の時(91.5%)に遅く進路を選択し、教師の関わりが弱く(16.1%)、親と相談して(50%)、職業学校を決める状況が分かった。職業学校を選択した理由は、「職業学校卒業後の進路を考えるから」(77.3%)、「自分の成績を考えるから」(73.7%)、「自分の興味・関心に合う専攻があるから」(73.1%)であり、一見自らの条件で判断して、現実的な進路選択に見える。しかし、学校選択に参考になる活動から見ると、「『高校案内』などの配布物」(70.1%)、「先生と生徒の二者面談」(69.4%)、「進路情報の掲示物」(66.7%)に頼りがちで、学校、専攻を選ぶことは、「表面化」とも言え、学校や専攻の実情は見えていない可能性がある。

学校別と学制別で見ると、ほぼ農村部出身のB校生徒は、他の3校より、積極的進路活動を取り組む姿勢が窺える。一方、5年コースの生徒は、学校を選択する時期、相談相手について、3年コースの生徒とあまり変わらないが、中学校の進路活動に意欲的参加したといえない。このことが職業学校への認知度を表面化し、学歴または「滑り止め」のため、35%の生徒は「不本意」のまま職業学校を選んでいたようである。

2 職業学校生活の様子

(1) 学校に対する満足度の変化

入学してから3年間を経て、学校に対する満足度の変化を図った結果、入学当時より、「満足」と思っている生徒は減少し、約2割の生徒は何らかの原因で、「満足」から「不満足」の態度に変わったようである。

学校別で満足度の変化を見ると、A、C、D

校の生徒は「不満足」への転化が激しい一方、B校の生徒の満足度は5%程度しか下がらなかったことがわかる。学制別で見ると、入学当時に学校に対する満足度の差がなかったとも言えるものの、現在に3年コースの生徒は「満足」と思っている生徒は6割であるに対して、5年コースの生徒の6割は「不満足」と感じているようである。

(2) 職業学校の学校生活への評価

学校生活を細分し、「授業」、「実習」、「進路」、「学校設備」、「課外活動」、「人間関係」等の12項目について満足度を尋ねた結果、やはりB校の生徒は、高い満足感を持っていることが分かった。しかし、全体から見れば、進路に大切だと思われる専門教科の学習、進路指導学習、職場実習学習がすでに満足度の低いランクに置かれている。つまり、職業学校生徒は学習に不満を抱えているとも言えるだろう。

学制別で見ると、「学校行事」をはじめ、いずれも3年コースの生徒のほうが高い満足度を示している。ここで興味深いことは、同じD校で勉強している3年コースと5年コースの生徒であるのに、同じのはずの「学校行事」、「学校設備」、「進路についての活動」の項目での満足感が非常に違うことから、5年コースの生徒は職業学校生活に、より高い望みを持っていることを推測できる。

(3) 進路決定状況—内定率とのギャップ

卒業直前の3年生に進路の決定状況を尋ねた。98%以上の内定率にもかかわらず、「進路がまだ決まっていない」生徒は、44%を占めていることがわかる。進路が決まれない多くの理由は、「将来どの道に進むかわからない」(78.4%)、「進学か就職か自営業か悩んでいる」(62.5%)になっている。つまり進路について、もっとも基本的進路方向が曖昧である。このような生徒は、これから職場に入っても、転職の予備軍になる恐れがあるだろう。

IV 結論と課題

1 中学校における職業教育との連携

B校の生徒は全体的に高い数値を示した。

その原因は、ほぼ農村部出身という特徴は、職業学校への動機づけと関与しているほか、B校生徒は中学校段階に積極的に進路活動を参加することによって、職業学校への進学が満足できる一つの要因になると考えられる。したがって、複線型の中国教育制度により、生徒は一度職業学校を選択すると、進路変更が困難になるという実情を踏まえると、中学校時点の職業教育、職業指導は極めて重要だと考えられる。

2 充実した職業学校生活の運営

職業意識は、学校教育活動を全般に通して、学科のカリキュラムの特性に合わせることによって形成される。今回の調査で明らかになったのは、学習の内容及び教師の指導等の学校教育活動は、満足度の低いランクにおかれていることである。むしろ就職口が重要だが、生徒は充実した学校生活を送れることも、今後職業学校の教育課題になると考えられる。

3 生徒のモチベーションへの配慮

5年コースの生徒は、家庭の事情等の要因により、職業学校を選んでも、学習目標、進路方向について、3年コースの生徒と異なる。学校に同じく取り扱われると、学校生活に「不満足」な気持ちを抱え、「学校不適応」が生じる可能性があると思われる。したがって、5年コースの生徒に対して、よりきめ細かな教育的配慮、もしくは高等職業教育に任せたいほうが、生徒は充実した学校生活を送ることができるだろう。

文献

- 中華人民共和国国务院新聞弁公室「中国就業状況と政策」(2004)
- 丁妍「中国における中等職業教育現状と問題点—その低迷の原因分析を中心として」成蹊大学アジア太平洋研究センター(2001)
- 劉文君『中国の職業教育拡大政策—背景・実現過程・帰結』東信堂(2003)
- 労働政策研究・研修機構「アジア諸国における職業訓練政策—若者層を中心に」(2005)